

使徒言行録 第10章1～33節

今日の聖書の箇所には、ペトロが見た幻の話が出てきます。幻の中で、ペトロは天から大きな布のような入れ物が下ってくるのを見ました。そこには、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていました。そして「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」と言う声を聞きます。しかしペトロは旧約聖書に記されている律法に従おうとします。「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません」。するとまた声が聞えてきました。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」。その後、聖書には続けてこう記されています。『こういうことが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた』。ということは、ペトロは三度、神様の言葉を否定したことになります。なぜ、ペトロはそこまでかたくなに、神様の命令を破ってまで律法に忠実であろうとしたのでしょうか。そこには、当時イスラエルが置かれていた状況が関係しているようです。当時、イスラエルはローマ帝国の支配下にありました。ローマの属国。いわゆる植民地状態でした。その植民地状態の中で、イスラエルの人々は自分たちのアイデンティティを保とうと必死だったことでしょう。ユダヤ人はギリシア人とは違うのだ。ローマの支配下にありながら、ローマを形作っていたギリシア人との違いを明らかにしていく。ギリシア人は、汚れた物を平気で食べる汚れた民族だ。でも我々ユダヤ人は違う。たとえイスラエルがローマの支配下にあったとしても、自分たちユダヤ人は神に選ばれた民である。汚れた物は決して口にしない誇り高き民族なのだ。ユダヤ人はそうやって、自分たちの民族性、アイデンティティを必死に守ってきました。ローマ帝国という強大な力の元で、ユダヤ民族としての誇り、神から選ばれたという特殊性を守り続けていくために、ユダヤ人にとって、汚れた物を口にしないことはとても大事なことがらだったのでしょう。汚れた物を口にしない。そして、汚れた物を平気で食べる汚れた民族とは、一緒に食事をしない。それが神に選ばれた民、ユダヤ人としての誇りを守る方法だったのです。ペトロも同じように、たとえ神様の命令であったとしても、汚れた物は口にしないという姿勢を貫き、三度も神様の言葉を否定するのです。

しかしペトロは、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」と神様が三度もくり返して語られた言葉がとても気になりました。ペトロは、今見た幻はいったい何だろうかと一人で思案に暮れていました。すると、ローマの「イタリア隊」の百人隊長コルネリウスから使いが来て、ペトロを家に招きたいと申し出ます。異邦人のコルネリウスからユダヤ人であるペトロが招きを受けた。これはとてもたいへんなことでした。28節でペトロ自身がこう語っています。「あなたがたもご存じのとおり、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられています。けれども、神はわたしに、どんな人をも清くない者とか、汚れている者とか言うてはならないと、お示しになりました」。ペトロはこのとき初めて、神様が見せてくださった幻の本当の意味を知ります。ペトロは、自分の見た幻が食べ物のことではなく、人間のことを言っていたのだと、そこで気づかされます。こうして異邦人であったコルネリウスは、44節以降に記されているように、ペトロによってバプテスマを受けることになるのです。コルネリウスのバプテスマの話は、次週の礼拝で学びたいと思います。

さて今日の話の中で、救われたのはいったい誰だったのでしょうか。イエス・キリストの名によってバプテスマを受けたのは、異邦人のコルネリウスたちでした。しかし神様の前で本当に変えられたのは、ペトロでした。ペトロはそれまで、汚れた物を食べることをかたくなに拒んできました。そして同時に、汚れた物を食べる異邦人を拒んできたのです。神から選ばれた特別な民・選民であるユダヤ人と、神には選ばれなかった汚れた異邦人とを区別するために、汚れた物を食べる異邦人たちとは同じ席で食事をしなかった。そのようなペトロのかたくなな心が、神様から言われた言葉、「神が清めた物を、清くないないなどと、あなたは言うてはならない」という言葉によって崩されていった。この言葉によってペトロ自身が崩され、人を分け隔てしてきた自分の姿から、なんびとをも区別なされない神様の方へと心を向き直させられた。心が向き直ること。方向を転換すること。悔い改めが起こったのです。コルネリウスという異邦人が悔い改め、神の方へと方向転換したその場面に出会うことによって、ペトロ自身もその心の向きをもう一度神様の方へと向けさせていただいた。ペトロの方向転換、悔い改めが起こったのです。コルネリウスの救いの場面において、ペトロの悔い改めも同時に起こされていったのです。

私たちはよく、人を分け隔てします。誰かを汚れた者、正しくない者、清くない者とすることによって、自分自身が汚れていない者、正しい者、清い者であろうとするのです。人を分け隔てする「清い、清くない」という枠から、私たちが自由に解放されていくこと。今日の聖書の箇所に出てくるペトロのように私たち自身がそこから自由にされていくこと。それが、イエス・キリストにあって本当に自由にされ、解放された者たちの姿なのです。

異邦人であったコルネリウスから招かれて出かけていったユダヤ人ペトロの姿。また、ローマ帝国の中ではユダヤ人よりも地位が高いコルネリウスが、ギリシア人の支配下にあるユダヤ人のペトロを自宅に招き、ペトロの足元にひれ伏そうとした姿。互いに相手思いやり、尊重しあい、一緒に食事の席に着く様子を想像してみると、これこそが本当の平和の姿なのだと思います。そこにはもはや、清い、清くない、という分け隔ては一切ない。異邦人とユダヤ人とと一緒に食事をしている美しい光景が浮かんできます。

アメリカで黒人解放運動に携わったマーチン・ルーサー・キング牧師が語った「私には夢がある」という有名な説教があります。

私には夢がある。「万人は生まれながらにして平等である。これが自明の理であることをここに保証する」この国家の基本理念を真の意味によって実現する日が来るという夢が。

私には夢がある。いつか、ジョージアの赤土の丘に元奴隷の息子たちと元奴隷所有者の息子たちが一緒に座り、友愛のテーブルを囲む日が来るという夢が。

私には夢がある。いつか、あの差別の熱にうだるミシシッピ州さえもが自由と正義のオアシスに変わる日が来るという夢が。

私には夢がある。いつか、私の子どもたち4人が肌の色でなく中身で判断される、そんな国に住む日が必ずくる。

私には夢がある。差別主義者がはびこるアラバマ、知事は口を開けば州権優位、実施拒否で忙しい、そんなアラバマにもいつかきっと、幼い黒人の少年少女が幼い白人の少年少女と手と手を取り合って兄弟のように仲睦まじく暮らしていける日が来るという夢が。

私には夢がある。「谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。主の栄光がこうして現れるのを、肉なる者は共に見る」。

(イザヤ書 40章4～5節)

これが我々の希望。この信仰を抱いて私は南部に帰って行こう。

この信仰があれば、絶望の山から希望の石を切り出すことだって叶う。この信仰があるなら、この国に溢れる騒々しい不協和音を、友愛の美しいシンフォニーに変えていくことだってできる。この信仰があるからこそ、我々は共に働き、共に祈り、共に闘い、共に牢に入って、共に自由のために立ち上がることができる。いつかきっと、いつかきっと自由になる日が来る、そう信じればこそ。

私たちはこんな夢を見ることができるでしょうか。同じテーブルを囲んで、バプテストの人も、他のプロテスタントの人たちも、カトリックの人たちもいる。さらにユダヤ教徒も、イスラム教徒も、仏教徒も、他のあらゆる宗教の人たちもいる。

同じテーブルを囲んで、日本人も、韓国人も、中国人もいる。アメリカ人も、イラン人も、イスラエル人もいる。ウクライナ人も、ロシア人もいる。ミャンマーの山岳民族の人たちも、香港で民主化闘争をしている人たちも、アフガニスタンで苦闘している人たちも、またアフリカでお腹を空かせている子どもたちも、戦火の中で逃げ惑っている子どもたちも一緒にいる。

私たちはこんな夢を見ることができるでしょうか。そしてこれは不可能なことでしょうか。いや、神には不可能なことではないのです。問題は、私たちがその夢を見ることができるかどうかです。問題は、分け隔てをしている私たち自身が変えられるかどうかです。私たちの教会は、誰が来ても受け入れられる教会になっているのでしょうか。日本語が分からない人。体が不自由な人。性的少数者の人。あるいは、住む家がない人。ボロボロの服を身にまとっている人。もう何日も食べ物を食べていない人。私たちの教会は、誰が来ても受け入れることができるでしょうか。

清いか、清くないか。問われているのは彼らではなく、私たち自身なのです。私たちが本当に悔い改めるまで、主は繰り返しくり返し、こう語られるのです。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」。

私たちは、神様の平和な世界が来ることを願っています。神様の平和な世界とは、自分と同じ考えや同じ思想を持った人たちだけを集めて、自分の居心地の良い居場所を作ることではありません。自分と同じ考え方をを持った人たちとだけ交わり、自分と違う考え方の人たちを排除する。それは神様の願う平和ではありません。そうではなく、考え方や思想の違う者同士が相手との違いを受け入れ、互いに認め合い、共に生きることが、神様の願う平和の姿なのではないでしょうか。そのためにはまず自分を変えられていかなければなりません。自分が正しい、あの人は間違っている、という思いを捨てて、謙虚になって互いに違いを認め合いつつ、共に神様の御前にひざまずき、共に礼拝を献げること。そのような平和を神様は願っておられるのではないのでしょうか。私たち神戸西教会も、そのような教会であり続けたいと願います。

お祈りしましょう。